

乳幼児を持つ母親の育児不安の現状とその要因

宮本政子^{1)*}, 舟越和代¹⁾, 中添和代¹⁾, 時岡恵美²⁾, 森美代子²⁾, 渋谷幸彦³⁾

¹⁾香川県立医療短期大学看護学科, ²⁾牟礼町役場, ³⁾渋谷小児科クリニック

Uneasiness of Mother for Child-rearing and its Factor

Masako Miyamoto^{1)*}, Kazuyo Funakoshi¹⁾, Kazuyo Nakazoe¹⁾,
Emi Tokioka²⁾, Miyoko Mori²⁾ and Sachihiko Sibuya³⁾

¹⁾Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences,

²⁾Mure Town Public Office, ³⁾Sibuya Pediatrics Clinic

Abstract

The purpose of this paper is to report on the present condition and the factor of uneasiness of mother for child-rearing, especially of infant. Questionnaire about uneasiness for child-rearing were distributed to 215 mothers with infants, and 147 answers were collected.

The following results were obtained through the analysis of the answers.

- 1) In the group of mothers who feel child-rearing uneasy more than the other group, their husbands usually come home later than the other group, and the mothers in the group feel the lack of child care by their husbands.
- 2) This tendency is remarkable among the mothers who have no special work and have two or more children. It may be partly because they have few friends with whom they can talk frankly.

The analysis of the questionnaire showed mothers with infants have expected to talk about matters in the daily life with infants more than special topics in the child-rearing, but there are few places to communicate where they can speak freely each other. We suggest in this paper that health professionals have to consider offering the place of communication for such mothers.

Key Words : 育児不安 (child-rearing uneasiness), 育児支援 (child-rearing support),
乳幼児を持つ実母 (real mother with infant)

*連絡先 : 〒761-0123 香川県木田郡牟礼町大字原281-1 香川県立医療短期大学看護科

*Corresponding address : Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences,
281-1 Hara, Mure-cho, Kita-gun, Kagawa 761-0123, Japan

はじめに

近年わが国では核家族化と少子化が進み、家族や地域社会との関連性が希薄化してきており、育児に関わる母親を取り巻く社会環境も大きく変化している。現在、育児をしている母親達は、自らの成長過程において乳幼児と触れ合う機会が少なく、母親としての育児能力を獲得しないまま結婚や出産に至っていることから、育児不安^{*}や育児ストレスが大きいといわれている¹⁾。このような現状に対して、母親が地域社会と効果的な交わりを持つことによって育児不安やストレスが軽減されることが明らかにされてきている²⁾。

地域社会と関わりを持つことによる育児不安の軽減について Antonucci, T.³⁾は「母親が、誰から、どのように、どれだけ支援されたと感じているか、その要因の分析が必要」と述べており、地域特性の違いによる育児観や家族観、母子保健ニーズを分析し、育児支援の在り方を検討することが現代社会における重要な課題と考えられる。この点について我々はこれまでに、幼児を持つ母親に対する吉田ら⁴⁾の育児不安スクリーニング尺度を用いた調査により、「夫のサポート」と「子どもの育てやすさ」についての質問項目と、母親の育児不安との間に関連性が認められるという結果を得た⁵⁾。

そこで今回は、より具体的に育児不安の現状を把握し、地域における育児支援の方法を検討することを目的として、育児協力者や家族構成および就労状況など「母親の属性」と育児不安との関連性や、母親同士の交流の現状について調査を行った。その結果、保健医療従事者の地域における育児支援の在り方に関する示唆が得られたので報告する。

調査方法

1. 対象

本県 M 町が実施するポリオ・BCG 予防接種対象の乳幼児を持つ母親215名中、有効な調査表を回収できた147名（有効回答率68.4%）を対象とした。

2. 調査期間

調査期間は2000年1月～3月である。

3. 質問紙の構成

質問紙は以下の3部で構成されている。

1) 対象者の属性

母親の年齢、予防接種対象の乳幼児の年齢、昼間と夜間の養育者、家族構成と成員数、子どもの数、仕事の有無、友達の有無、育児協力者、夫の平均帰宅時間等。

2) 母親の日頃の気持ちや育児についての意識

吉田ら⁴⁾の1歳6ヶ月児用育児不安スクリーニング尺度を用いた。①育児不安(16質問項目)、②育児満足(8質問項目)、③自己効力感(3質問項目)、④夫のサポート(7質問項目)、⑤子どもの育てやすさ(3質問項目)、⑥相談相手の有無(4質問項目)の6尺度、計41質問項目で構成されている。調査の偏りをさけるために質問項目はランダムに並べた。

3) 母親同士の交流についての自由記述

4. 調査地の概要

M 町は香川県の県庁所在地である T 市に隣接する町で、人口は平成11年10月現在18,370人である。海岸沿いの町で漁業と農業従事世帯が多いが、近年 T 市のベッドタウンとして新興住宅も増え、昭和35年以降人口は毎年増えており、人口密度は郡部としてはかなり高い。年齢構成をみても、65歳以上の高齢人口率は16.3%であり、香川県全体の20.4%に比べて低く、若い年齢が多いことを示しており、また平成11年度の年間出生数は160人であった。（平成11年版香川の母子保健⁶⁾参照）

5. 調査手順

M 町のポリオ・BCG 予防接種対象の母親に質問紙を郵送し、回答は無記名とし、接種来所時に回収した。

1) 育児不安スクリーニング尺度のそれぞれの質問項目は、1「全くそうは思わない」(1点)から、4「よくそう思う」(4点)までの4段階で回答を求めた。

2) 育児不安の16質問項目の総得点から、吉田ら⁴⁾の評定基準をもとに、低不安群(軽い25点以下、やや軽い26～30点)、普通群(31～41点)、高不安群(やや高い42～45点、高い46点以上)に分類し、属性および育児不安以外の各質問項目との関連を分析した。

^{*} 育児不安：吉田ら⁴⁾の定義に基づき「育児に伴う自信のなさや不安、子どもと関わることの疲労感、育児からの逃避願望や社会からの孤立感」とした。

表1 対象の属性

n=147			
属 性	カテゴリー	人	%
年齢	20～24歳	15	10.9
	25～29歳	55	37.4
	30～34歳	58	39.5
	35～40歳	16	10.9
予防接種対象児の年齢	0～5ヶ月	28	19
	6～11ヶ月	42	28.6
	1～1.5歳	54	36.7
	1.6～2歳	14	9.5
	2歳以上	7	4.8
昼間の養育者	母親（本人）	118	80.3
	実母又は義母	6	4.1
	保育所	12	8.2
	その他	11	7.5
夜間の養育者	母親（本人）	72	49
	母親と夫	70	47.6
	母親と夫以外	3	2
	その他	2	1.4
家族構成	核家族	119	81
	複合家族	28	19
家族成員数	3または4人	105	71.4
	5または6人	38	25.9
	7または8人	3	2
	9人	1	0.6
子どもの数	1人	72	49
	2または3人	72	49
	4人	3	2
仕事の有無	専業主婦	107	72.8
	仕事有り	38	25.8
友達の有無	有り	109	74.1
	無し	35	23.8
育児協力者	有り	138	93.9
	無し	7	4.8
夫の帰宅時間（平均）	18時未満	38	25.9
	18～20時未満	59	40.1
	20～22時	35	23.8
	その他	13	8.8

3) 統計処理はエクセル統計および統計解析ソフト SPSS 9.0 J for Windows を用い、有意差検定は χ^2 検定及び t 検定を行い、 $p < 0.05$ を「有意差あり」とした。

結 果

1. 対象（母親）の属性（表1）

母親の年齢は「25～34歳」が約77%を占めていた。予防接種対象の乳幼児の年齢は、「1歳未満」が47.6%、「1～1.5歳」が36.7%であった。子供の養育者については「昼間」は「母親のみ」が80.3%で最も多かったが、「夜間」は「母親だけでなく夫も役割を担っている」が47.6%であった。家族形態は「核家族」が81.0%と大半を占め、家族成

員数は「3または4人」が71.4%、子どもの数は2人以上が51.0%であった。母親の就労状態については「専業主婦」が72.8%を占め、パートタイム、自営業も含め働く母親が25.8%であった。家のことや日常の出来事などについて「何でも気楽に話せる友達の有無」では「友達がいる」が74.1%、「いない」が23.8%であった。「育児の協力者」は、「いる」が93.9%であった。夫の平均帰宅時間は、「18～20時未満」が40.1%、「18時より早い」が25.9%で、不規則だったり、22時より遅い帰宅の者も約1割いた。また、表1には示していないが「育児に困った時の相談者」では、「一番目の相談者」は「夫」が66.7%であり、次いで「実母」が18.4%であった。医師や保健婦などの専門職は、4番目あるいは5番目の相談者とする回答が約1割みられた。

2. 母親の日頃の気持ちや育児についての意識（表2および3）

『育児不安』についての16項目の質問に対し、次の7項目については80%以上の母親が「いくらかそう思う」も含め「そう思ったことがある」と回答した。それは「疲れやストレスがたまりイライラする」、「自分はいまうまく子育てをしていない」、「子育てをどうしたらいいかわからなくなる」、「自分の子育ての方法はこれでいいのかと思う」、「子育てを離れて一人になりたい」、「体の疲れがとれずいつも疲れている」、「育児や家事など何もしたくなくなる」であった。

『育児満足と自己効力感』では、11項目の質問に対して、80%以上の母親が、「子どもの成長を楽しみに思う」、「子どもを産んでよかったと思う」、「子どもを宝物のように大切に思える」、「子どもを育てていて、自分はこの子にとって重要な存在であると思う」について「よくそう思う」と答えていた。一方、「子どもができてから自分の仕事に困難を感じるがそれも良し」、「子どもと一緒にいるとゆったりした気分になる」の質問には「全くそうは思わない」と否定的に捉える母親が約1割いた。

『子どもの育てやすさ』では、約80%の母親が「子どもの発育発達はおおむね順調である」の質問に「よくそう思う」と答え、「育てやすい、機嫌のよい事が多い」については約半数の母親が「そう思う」と答えていた。

『夫のサポート』では、「夫と自分の二人で子どもを育てている感じがする」、「夫は家事に協力

表2 母親の日頃の気持ちや育児不安

n=147

質問内容		回答	よくそう 思う人 (%)	時々そう 思う人 (%)	いくらか そう思う 人(%)	全くそう は思わな い人(%)	無回答人 (%)
育児不安	自分はうまく子どもを育てていないと思うことがある。		12(8.2)	76(51.7)	37(25.2)	22(15.0)	0(0)
	子どもを育てる自信がないと思うことがある。		9(6.1)	48(32.7)	42(28.6)	48(32.7)	0(0)
	毎日生活していて心に張りを感じられない。		9(6.1)	35(23.8)	40(27.2)	63(42.9)	0(0)
	疲れやストレスがたまっていてイライラする。		22(15.0)	65(44.2)	47(32.0)	13(8.8)	0(0)
	ゆったりとした気分で子どもと過ごせない気がする。		13(8.8)	49(33.3)	52(35.4)	33(22.4)	0(0)
	子どもを育てていて自分だけが苦勞していると思う。		8(5.4)	32(21.8)	35(23.8)	72(49.0)	0(0)
	子どもを育てていて、どうしたらいいかわからなくなることがある。		12(8.2)	63(42.9)	47(32.0)	24(16.3)	1(0.7)
	何か心が満たされず空虚である。		8(5.4)	32(21.8)	19(12.9)	88(59.9)	0(0)
	自分の子どもの育て方は、これでいいのだろうかと思うことがある。		26(17.7)	63(42.9)	43(29.3)	14(9.5)	1(0.7)
	自分は子どものことをわかっていないのではないかと思う。		5(3.4)	56(38.1)	52(35.4)	34(23.1)	0(0)
	子育てを離れて一人になりたい気持ちになることがある。		22(15.0)	57(38.8)	38(25.9)	29(19.7)	1(0.7)
	一人で子どもを育てている感じがして落ち込む。		4(2.7)	23(15.6)	33(22.4)	85(57.8)	2(1.4)
	体の疲れがとれずいつも疲れている感じがする。		23(15.6)	51(34.7)	48(32.7)	25(17.0)	0(0)
	子どもをたたいたりしかったりしたときにくよくよ考える。		13(8.8)	38(25.9)	51(34.7)	41(27.9)	4(2.7)
	だれも自分の子育ての大変さをわかってくれないと思う。		4(2.7)	23(15.6)	25(17.0)	95(64.6)	0(0)
	育児や家事など何もしたくない気持ちになることがある。		19(12.9)	52(35.4)	50(34.0)	26(17.7)	0(0)

表3 母親の日頃の気持ちや育児についての意識（育児不安以外）

n=147

質問内容		回答	よくそう 思う人 (%)	時々そう 思う人 (%)	いくらか そう思う 人(%)	全くそう は思わな い人(%)	無回答人 (%)
育児満足	子どもを育てるのが楽しいと思う。		91(61.9)	39(26.5)	13(8.8)	2(1.4)	2(1.4)
	子どもの成長を楽しみに思う。		132(89.8)	11(7.5)	3(2.0)	0(0)	1(0.7)
	子どもを産んでよかったと思う。		132(89.8)	9(6.1)	4(2.7)	0(0)	2(1.4)
	母親として子どもに接している自分も好きである。		63(42.9)	61(41.5)	18(12.2)	5(3.4)	0(0)
	子どもができてから自分の仕事に困難を感じるがそれもよし。		39(26.5)	55(37.4)	33(22.4)	12(8.2)	8(5.4)
	子育ては自分にとってやりがいのあることだと思う。		70(47.6)	48(32.7)	25(17.0)	3(2.0)	1(0.7)
	子どもを宝物のように大切に思える。		122(83.0)	19(12.9)	6(4.1)	0(0)	0(0)
	子どもと一緒にいるとゆったりとした気分になる。		36(24.5)	64(43.5)	37(25.2)	10(6.8)	0(0)
自己効力感	自分がほかのだれよりも自分の子どものことをわかっている。		78(53.1)	39(26.5)	27(18.4)	3(2.0)	0(0)
	子どもを育てていながら自分はこの子にとって重要な存在である。		119(81.0)	18(12.2)	10(6.8)	0(0)	0(0)
	子どもは私と一緒にいるのを楽しんでいると思う。		83(56.5)	49(33.3)	15(10.2)	0(0)	0(0)
育てやすさ	育てやすい子どもであると思う。		76(51.7)	42(28.6)	22(15.0)	6(4.1)	1(0.7)
	機嫌のよいことが多い子どもだと思う。		70(47.6)	43(29.3)	27(18.4)	6(4.1)	1(0.7)
	子どもの発育発達はおおむね順調である。		119(81.0)	18(12.2)	7(4.8)	3(2.0)	0(0)
夫のサポート	夫は家事に協力的である。		43(29.3)	40(27.2)	41(27.9)	23(15.6)	0(0)
	夫と自分の二人で子どもを育てている感じがする。		49(33.3)	36(24.5)	34(23.1)	27(18.4)	1(0.7)
	夫はよく相談相手になってくれると思う。		57(38.8)	38(25.9)	32(21.8)	20(13.6)	0(0)
	夫といろいろなことを話す時間がある。		60(40.8)	36(24.5)	39(26.5)	12(8.2)	0(0)
	夫は子どもの相手をよくしてくれる。		67(45.6)	45(30.6)	31(21.1)	4(2.7)	0(0)
	夫は自分のことを理解してくれていると思う。		49(33.3)	48(32.7)	37(25.2)	13(8.8)	0(0)
	家庭内の重要なことを決定するのに夫がいてくれてよかった。		89(60.5)	27(18.4)	22(15.0)	9(6.1)	0(0)
相談相手	子育てのことを相談できる人がいてよかったと思う。		105(71.4)	22(15.0)	18(12.2)	2(1.4)	0(0)
	子どものことでだれにも相談できる相手がなくて困る。		5(3.4)	8(5.4)	20(13.6)	114(77.6)	0(0)
	何でも打ち明けて相談できる人がいてよかったと思う。		94(63.9)	22(15.0)	26(17.7)	5(3.4)	0(0)
	子どものことでだれに相談したらいいかわからなくて困る。		3(2.0)	9(6.1)	22(15.0)	113(76.9)	0(0)

表4 育児不安の程度

n=147

	総得点値	不安の程度	対象人数	%
低不安群	25点以下	軽い	19	12.9
	26～30点	やや軽い	30	20.4
普通群	31～41点	普通	59	40.1
高不安群	42～45点	やや高い	14	9.5
	46点以上	高い	25	17

表5 夫の帰宅時間と育児不安との関係

n=147

属性の項目	低不安群		高不安群	
	軽い	やや軽い	やや高い	高い
平均帰宅時間	18.8時	19.6時	20.1時	20.8時

的である」,「夫はよく相談相手になってくれる」の質問に,「全くそうは思わない」と否定的に捉えている母親が10%以上いた。

『相談相手の有無』では,70%以上の母親が「子育てのことを相談できる人がいてよかった」と「よくそう思う」と回答していた。

3. 育児不安の要因(表4, 5および6)

1) 属性との関連

育児不安の16質問項目の総得点から,低不安群,普通群,高不安群に分類し,不安の程度と対象数を表したものが表4である。低不安群が49名(33.3%),普通群が147名(40.1%),高不安群が39名(26.5%)であった。対象の属性のなかでも低不安群と高不安群に差が認められた結果を表5および6に示した。表5は不安の程度別に「夫の平均帰宅時間の平均値」を表している。有意差は認められなかったものの不安の強い母親ほど「夫の平均帰宅時間が遅い」という傾向を表す結果であった。その他の属性について低不安群と高不安群を比較したものが表6である。有意差は認められなかったが,低不安群では「夜間の養育者は夫と2人」と回答したのが59.2%であるのに対し,高不安群では41%で,高不安群では「母親(本人のみ)」の割合が高かった。さらに高不安群の子どもの数は2人以上で,仕事を持っているが少なく専業主婦の割合が有意に高かった($p<0.05$)。育児の協力者の有無では両群とも「有り」が80%を越え,有意差は認められなかったものの,高不安群は「家のことや日常の出来事をなど何でも話せる友達がいない」と答えた割合が有意に高

表6 属性と育児不安との関係

n=147

属 性	低不安群		高不安群	
	人	%	人	%
子どもの数が2人以上	9	18.4	22	46.2 **
夜間の養育者が夫と2人	29	59.2	16	41.0
何でも話せる友達がいない	11	22.4	16	41.2 *
育児の協力者がいる	47	95.9	34	87.2
仕事を持っている	18	36.7	5	12.8 *
交流の希望がある	29	59.2	22	56.4

** $p<0.01$ * $p<0.05$

表7 育児不安とそれ以外の質問との関係

n=88

質問項目の尺度	低不安群		高不安群	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
育児満足	28.98	2.8	23.5	5.26 **
自己効力	10.88	1.36	9.85	1.69 **
夫のサポート	22.8	5.02	18.06	5.66 **
子どもの育て安さ	10.67	1.86	9.09	2.53 **
相談者の有無	11.47	1.08	8.97	2.67 **

** $p<0.01$

かった($p<0.05$)。

2) 育児不安以外の質問項目との関連(表7)

育児不安以外の「育児満足」,「自己効力感」,「夫のサポート」,「子どもの育て安さ」,「相談者の有無」の5つの尺度について,平均値を低不安群と高不安群で比較したものが表7である。低不安群に比べ高不安群では全ての尺度において平均値が低く,有意差が認められ($p<0.01$),高不安群は育児満足感や自己効力感が低く,子どもの育てにくさを感じながら育児を行い,夫からのサポートも充分と感じていないことが判った。

4. 母親同士の交流についての現状と希望(図1および2)

「母親同士の交流があるか」の質問に対し,「参加したことがある」が32.0%(図1)で,その内容は「保育所主催の子育て支援活動への参加」や「自主的な仲間の集り」,乳児相談や乳児検診の集りを「交流の場」としてあげている者もいたが,「交流が無い」が67.3%と全体では多かった。また,「交流の場があれば参加したいか」の質問には61.2%の者が「参加したい」と答えていた(図2)。「具体的にどのようなメンバーと交流の場を持ちたいか」の質問には,「家が近い」,「同年代の子どもの持つ親同士の交流」,「家族構成が似て

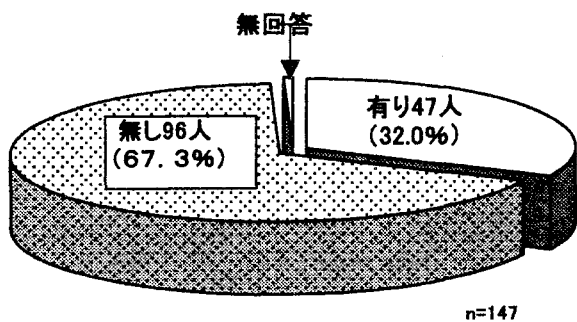


図1 母親同志の交流経験

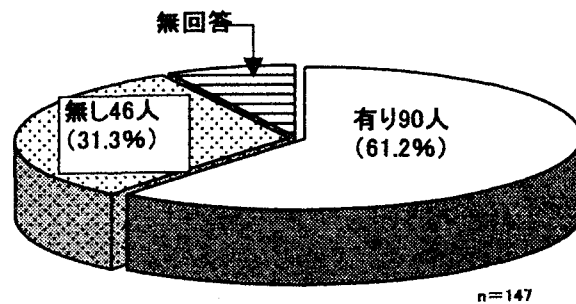


図2 交流の場への参加希望

いる人との交流」を希望する記述が多かった。また、仕事を持つ母親の意見として「土日に参加できる気楽な場で子供と一緒に遊びたい」という意見も多くみられた。「交流の内容についての希望」では「子どもと一緒に母親も遊べる交流」、「屋外で行う季節の行事や体操」、「悩みの相談や情報交換」という意見が多かった。

考 察

母親は、子どもにとって人生における最初の、そして最強の愛情対象であり、その関係はその人がもつその後の全ての愛情関係の原型となり、子どもの成長にとって極めて重要な役割を担っている⁷⁾。また、子どもの精神的安定は主として母親との肌のふれあいによって保持されるが、それは母親の精神の安定性とも大きく関連しているとされている⁸⁾。これらの意味において、母親の育児における不安やストレスを取り除くことが重要となってくるが、最近の社会環境の変化は母親の育児不安やストレスを増大させている。

今回の調査対象とした母親達も、ほとんどが仕事も持たない専業主婦で、交流の場もあまりなく、核家族の中で乳幼児の育児に専念しており、その80%以上が育児に疲れたり、イライラしたり、自分の育児に自信を持てない感情を経験していた。佐々木⁹⁾は育児疲労の特徴について、労働と休息の区分が明確でなく、24時間の継続労働であり、このことが母親が異常に疲れる原因と指摘している。大日向¹⁰⁾の調査でも「育児に明け暮れ、世の中から取り残される不安や葛藤から育児に強いストレスを覚える」ことが明らかになっており、これらの結果とも一致していた。

従来わが国では「女性は誰でもよき母性を発揮できる」という考えのもとに、母親達は育児による心身の疲労や自由等の束縛のなかで、育児の大半を一

人で担うのが当たり前とする社会的風土があった。しかし母親といえども育児が完璧にできるわけではなく、育児に多くの支援が注がれてこそ、子どもが健やかに育つことの認識が重要視されるように変化してきている¹¹⁾。特に母親にとって重要な支援者は「夫」であり、夫婦関係が育児不安と強い関連性を持っている。大日向¹²⁾は「影の薄い夫の存在や、夫との関係に満たされない苛立ちが育児ストレスにつながる」と指摘しているが、今回の調査でも不安の高い母親ほど夫の帰宅時間が遅いと回答し、夜間の養育者として「夫」を認知していない割合が高かった。高不安群の「夫のサポート」についての得点平均値は低不安群に比べ有意に低く、育児において夫からのサポートを充分と感じていないことが推測された。夫から情緒的なサポートのある妻は育児ストレスが低く、母子間の愛着が安定する傾向にあり¹³⁾、育児期の子どもをもつ母親の抑うつ重症度を左右する要因として、夫が子どもの世話をしない、一生懸命なのに誰もわかってくれない、という育児サポートの欠如が影響すると考えられる。我々のこれまでの調査でも「夫のサポート」についての質問項目の中で、「夫といろいろなことを話す時間がある」が育児不安と関連するという結果⁵⁾を得ており、夫が育児の実際的な役割を担うことよりもむしろ、「気持ちを分かり合える関係」が重要で、育児支援の具体的方法として夫との話し合いが持てるような場の提供が大切と考えられる。

さらに夫以外の支援者として、友達の存在が母親の育児不安に大きな影響を与えていることが今回の調査で明らかとなった。高不安群の母親は、育児の協力者はいても「何でも話し合える友達」がいな割合が高かった。このことは育児の実際的な役割分担も重要であるが、些細なことであっても気軽に直ぐに相談できるような交流関係にある友人の存在が重要であることを示唆している。それは育児に困った時の相談者として、医師や保健婦など医療専門

職の順位が夫や友人より低いことから窺える。特に高不安群は、初めての育児をする母親より、2人以上の子供を持つ母親が多いことから、地域における育児支援の方法として、専門家による専門的知識よりも、共感しあえる関係づくりの方がより重要であることを示している。

今回の調査では、乳幼児の育児を行っている多くの母親は、育児不安の有無に関わらず、地域における母親同士の交流の場を望んでいたが、現在M町には町が推進する育児サークルなどの交流の場が存在しない。調査地域は郊外のベッドタウンであり、今後さらに乳幼児を持つ若い世代の核家族が増加することが考えられる。同世代の子供を持つ母親や父親が、近隣の人たちと助け合いながら育児ができる環境づくりをサポートしていかなければならない。子どもを心身ともに健全な人間として育て上げるのは、並大抵のことではないが、努力を重ねて適切な養育行動をすることにより、母親は人間としてさらに成熟すると考えられる。今回調査を行った80%以上の母親が「子どもの成長を楽しみに思う」、「子どもを産んでよかったと思う」、「子どもを宝物のように大切に思える」、「子どもを育てていながら自分はこの子にとって重要な存在であると思う」について、「よくそう思う」と答えていた。このようなポジティブな感情をさらに育み、育児によって豊かな人生を過ごすためにも、育児サークルなどの子どもを持つ家族間の交流の場を提供し、家族のライフサイクルに応じた発達の促進も含めた側面的支援をする必要があると考える。

まとめ

乳幼児を持つ母親215名に吉田らの育児不安スクリーニング尺度を用いた質問紙を配布し、147名から得た回答を分析した。その結果、育児不安の強い母親の特性として、夫の帰宅時間が遅く、夫と共に育児をしているという感情が希薄で、気軽に話せる友達が少ない、2人以上の子どもを持つ、専業主婦である母親が多いことが明らかとなった。

さらに育児不安の強さに関係なく、子育て中の母親は専門的知識よりも、むしろ日常の些細なことでも話し会えるような交流の場を希望していることがわかった。医療従事者にとって、このような希望に応えられるような育児支援の場の提供と育成が重要であることが示唆された。

謝 辞

本調査に快く承諾し協力していただいたお母様方に心から感謝致します。

文 献

- 1) 内藤直子 (2000) 地域における子育て支援活動。ベリネイタルケア, 19 (2): P.24-33.
- 2) 大久保功子 (2000) 親となることに関する理論と研究から。ベリネイタルケア, 19 (1): P.8-13.
- 3) Antonucci, T.C. (1985), "Social Support, Theoretical Advance", recent finding and pressing issues, The University of Michigan Survey Research Center, Michigan, P.21-34.
- 4) 吉田弘道, 山中龍宏, 巷野吾郎, 太田百合子, 中村孝, 山口規容子, 牛島廣治 (1999) 育児不安尺度の作成に関する研究 - 1歳半児の母親用試作モデルの検討 -。チャイルドヘルス, 2 (2): P.45-49.
- 5) 舟越和代, 中添和代, 宮本政子, 時岡恵美 (2000) 幼児を持つ母親の育児不安。日本公衆衛生雑誌, 47(11): P.534.
- 6) 香川県健康福祉部児童家庭課 (1999) "かがわの母子保健"。香川県, 高松, P.5-34.
- 7) 小川捷之 (1977) 人格形成における母親の意味。現代のエスプリ, 115: P.14-26.
- 8) 依田明 (1977) 現代の母親。現代のエスプリ, 115: P.6-12.
- 9) 佐々木保行 (1996) 母親の子育てと育児疲労の心理。現代のエスプリ, 342: P.98-106.
- 10) 大日向雅美 (1996) 子どもを愛せない最近の母親たち。現代のエスプリ, 342: P.55-69.
- 11) 大日向雅美 (1996) 母性から育児性へ。現代のエスプリ, 342: P.115-122.
- 12) 大日向雅美 (1996) 日本的な母子関係と夫婦関係。現代のエスプリ, 342: P.137-143.
- 13) 首藤敏元 (1997) 夫婦関係と子ども。ベリネイタルケア16: (9) P.37-42.

受付日 2001年1月5日